



E-ASIA
university of oregon libraries

<http://e-asia.uoregon.edu>

建築の本義

伊東忠太

初出：「建築世界」
1923（大正12）年9月

建築の本義

伊東忠太

ちかごろとき / " \ わがはい けんちく ほんぎ なん い むづ し
近頃時々我輩に建築の本義は何であるかなど、云ふ六ヶ敷

しつもん ていしゆつ わがはい こま ひと きんじけんちく
い質問を提出して我輩を困らせる人がある。これは近時建築

たい せいじん たいど きは まじめ てつていてき けんちく
に對する世人の態度が極めて眞面目になり、徹底的に建築の

こんぼんぎ かいけつ そ しゆつぱつ けんちく おこ い かんが
根本義を解決し、夫れから出發して建築を起さうと云ふ考へ

で てん むか わがはい ちうしんくわんき きん え
から出たことで、この點に向つては我輩は衷心歡喜を禁じ得ぬので
ある。

さ もんだい じつ てつがく れうぶん ぞく ようゐ
去りながらこの問題は實は哲學の領分に屬するもので、容易に

かいけつ せいしつ こらいいくた けんちくか しさうか
解決されぬ性質のものである。古來幾多の建築家や、思想家や、

がくしや げいじつか かくほうめん ひと もんだい つい かんが
學者や、藝術家や、各方面の人がこの問題に就て考へた

やう いま かつ ぐたいてきてつていてき ていせつ かくりつ
様であるが、未だ曾て具體的徹底的な定説が確立されたこと

き おそ こんご えいきう ていろん せいりつ え おも も
を聞かぬ。恐らくは今後も、永久に、定論が成立し得ぬと思ふ。若

けんちく こんぼんぎ かいけつ しんせい けんちく でき
しも、建築の根本義が解決されなければ、眞正の建築が出来ない

ならば、世間の殆んど總ての建築は悉く真正の建築でない

ことになるが、實際に於ては必しも爾く苛酷なるものではない。

もちろんもんだいせんもんかよつあくまでけんきう
勿論この問題は専門家に由て飽迄も研究されねばならぬのであ

るが。我輩は、茲には深い哲學的議論には立ち入らないで、極めて

つうぞくてきこれくわんかんさうたんのみ
通俗的に之に關する感想の一端を述べて見よう。

わがはいまけんちくもつとちうえうれいすなはちうかとつこれ
我輩は先づ建築の最も重要な一例即ち住家を取て之

かんがみちうなほしよくごといかんしよくほんぎ
を考へて見るに「住は猶食の如し」と云ふ感がある。食の本義

ついでせいりえいせいがくりかうしやくところそだけつ
に就て、生理衛生の學理を講釋した處で、夫れ丈けでは決して

えうれうえなんしよくしめいじんしんえいやう
要領は得られない、何となれば、食の使命は人身の營養にあるこ

もちろんだれじつさいあたいち／＼えいやういかな
とは勿論であるが、誰でも實際に當つて一々營養の如何を

ぎんみくものだいまあちびもくてきく
吟味して食ふ者はない、第一に先づ味の美を目的として食ふのである。

しかあちびおほまたどうじえいやうよろひと
併し味の美なるものは多くは又同時に營養にも宜しいので、人は

しらず／＼えいやううところてんはいざいめうぎしかいか
不知不識營養を得る處に天の配劑の妙機がある。然らば如何な

しゆるゐしよくもつてきたういぐたいてきじつさいもんだい
る種類の食物が適當であるかと云ふ具體的の實際問題にな

ると、その解決は甚だ面倒になる。熱國と寒國では食の

てきひちがおなふうどひとねんれいてきひちがおな
適否が違ふ。同じ風土でも、人の年齢によつて適否が違ふ、同じ

ねんれい たいしつしよくげふとう したがつ せんたく ちが うへこじん
年齢でも 體質 職業 等に 従て 選擇が 違ふ。その 上 個人

とくしゆ せいへき いはゆるす きら かふ この ところ
には 特殊の 性癖があつて、所謂 好き嫌ひがあり、甲の 好む 處は

おつ きら ところ いはゆるたでく むし すず うへこじん
乙が 嫌ふ 處であり、所謂 蓼喰ふ 蟲も 好き好きである。その 上 個人

けいざいじやうたい よつ ぜひ そあく しよく がまん ひと
の 經濟 状態に 由て是非なく 粗惡な 食で 我慢せねばならぬ 人もあ

ぜひ くわりやう びみ く ひと ひつきやう にん いろ
り、是非なく 過量の 美味を 食はねばならぬ 人もある。畢竟 十人十色

けつ りつ ゆ しよく ほんぎ りそう と み
で、決して 一律には 行かぬもので 食の本義とか 理想とかを 説いて見た

ところ じつさいもんだい あま やく た そ せい / " \ へうま
處で 實際問題としては 餘り 役に 立たぬ。夫れよりは「精々 うま

もの てきど く い もつと かんたん えうれう え へうご
い物を 適度に 食へ」と云ふのが 最も 簡單で 要領を得た 標語である。

けんちくこと ちうか まさ とほ せい / " \ ぜんび けんちく
建築 殊に 住家でも、正にこの 通りで、「精々 善美なる 建築を

つく い さいご けつろん しか ぜんび なん
造れ」と云ふのが 最後の 結論である。然らば 善美とは 何であるかと

はんもん それ しよく くわん の ところ どうこうゐきよく
反問するであらう。夫は 食に 關して述べた 所と 同工異曲で、

けんちく あ い ぜん くわがくてきでうけん ぐそく び
建築に 當てはめて云へば、善とは 科學的 條件の 具足で 美とは

げいじゆつてきでうけん ぐそく そ じつさいもんだい
藝術的 條件の 具足である。さて、夫れが 實際問題になると、

とち じやうたいふうど くわんけい ちうしや みぶん きやうぐう しゆみ
土地の 状態 風土の 關係、住者の 身分、境遇、趣味、

せいへき しさん かぞく しよくげふ たしゆ / " \ ざつた そいん こんらん
性癖、資産、家族、職業 其他種々 雜多の 素因が 混亂し

たがひ あいかうせう たうていたんじゆん りくつ べん りつ
て 互に 相交渉するので、到底 單純な 理屈一遍で 律すること

でき ぜん し それ おこな でき び ほつ それ
が出来ない。善と知りつゝも夫を行ふことが出来ない、美を欲しても夫を

あら でき やむ やむ やむ え けつてん
現はすことが出来ない、己を[#「己を」は底本では「己を」]得ず缺點だらけ

いへ つく なか ふゆくわい しの せいくわつ ゐ
の家を造つて、その中に不愉快を忍んで生活して居るのが

だいたすう おも
大多数であらうと思ふ。

けんちく ほんぎ い わがはい げんこん かんが
建築の本義は「善美」にあると云ふのは、我輩の現今の考へで

しか あ ひと けんちく ほんぎ い し
ある。併し或る人は建築の本義は「安價で丈夫」にあると云ふかも知れぬ、

またた ひと けんちく ほんぎ い し またた ひと
又他の人は建築の本義は「美」であると云ふかも知れぬ。又他の人は

けんちく ほんぎ い し いづ せい いづ じや
建築の本義は「實」であると云ふかも知れぬ。孰れが正で孰れが邪で

ようい わか ひと しんりじやうたい こゝ こと しんり
あるかは容易に分らない。人の心理状態は個々に異なる、その心理

きやうぐう したが したが いどう せいしつ もつ ゐ
は境遇に従て[#「従て」はママ]移動すべき性質を有て居る。

じぶん じ しんり へうじゆん これ たゞ どくだん た
自分の一時の心理を標準とし、之を正しいものと獨斷して、他の一

じ しんり ひにん とかくごもう おちい おそ おほい
時の心理を否認することは兎角誤妄に陥るの虞れがある。これは大

かうりよ こと
に考慮しなければならぬ事である。

それはさうとげんこんけんちく ほんぎ りさう つい しゆ / " \
莫遮現今建築の本義とか理想とかに就て種々なる

おろん まこと けつこう けんちくかい た なんら
異論のあることは洵に結構なことである。建築界には絶へず何等か

がくじゆつてきふうは しか ちんたい けつくわぶはい
の學術的風波がなければならぬ、然らざれば沈滞の結果腐敗す

るのである。偶には激浪怒濤もあつて欲しい、悪風暴雨もあつて欲しい、

い わがはい けつ らん この た くうき か かぜ よつ
と云つて我輩は決して亂を好むのではない、ただ空氣が五日の風に由

さうぢ か あめ よつ きよ こひねが よ
て掃除され、十日の雨に由て淨められんことを希ふのである。世の

けんちくか もちろん ばんじんし た けんちくかい もんだい ていしゆつ
建築家は勿論、一般人士が絶へず建築界に問題を提出し

ろんぎ たゝか きわ ひつえう たとひ ろんぎ
て論議を闘はすことは極めて必要なことである。假令その論議が

たせうじやうき いつ それ もんだい どうじ ろんぎ
多少常軌を逸しても夫は問題でない。これと同時にその論議を

ぐたいくわ けんちくぶつ じつげん さら のぞ たとひ
具體化した建築物の實現が更に望ましいことである。假令その

せいせき たせう けつてん みと それ もんだい もんだい
成績に多少の缺點が認められても夫は問題でない。問題は

かくじ くわいほう ところ えんりよ ひれき ところ いはゆる
各自その懷抱する所を遠慮なく披瀝した處のものが、所謂

けんちく こんぼんぎ かいけつ たい いか あんじ あた いか
建築の根本義の解決に對して如何なる暗示を與へるか、如何なる

こうけん いた
貢献を致すかである。

けんちく ほんぎ それ えいきう けんあん わがはい いまにわ これ
建築の本義、夫は永久の懸案である。我輩は今俄かに之

かいけつ のぞ けんきう ゆ た よ けんちく
が解決を望まない、ただいつまでも研究をつゞけて行き度い、世に建築

もの そんざい かぎ ろんぎ ゆ た こんにち
てふ物の存在する限り、いつまでも論議をつゞけて行き度い。今日

けんちく こんぼんぎ けつてい ふか うれ およ やす
建築の根本義が決定されなくとも深く憂ふるに及ばない。安んじ

なんじ この ところ く しか なんじ やしな やす なんじ
て 汝 の 好む 所 を 食へ、 然らば 汝 は 養 はれん。 安んじて 汝 の

この いへ すま しか なんじ かうふく
好む 家 に 住へ、 然らば 汝 は 幸 福 ならん。(了)

(大正十二年九月「建築世界」)

底本：「木片集」萬里閣書房

1928（昭和3）年5月28日発行

1928（昭和3）年6月10日4版

初出：「建築世界」

1923（大正12）年9月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：鈴木厚司

校正：しだひろし

2007年11月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）](http://www.aozora.gr.jp/)で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。